ドキュメント 帝銀事件

和多田進

ちくま文庫

ちくま文庫

ドキュメント帝銀事件

一九八八年七月二十六日　第一刷発行

著　者　和多田　進（わただ・すすむ）
発行者　関根栄郷
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二―八　〒一〇一―九一
電話東京二九一―七六五一（営業）
二九四―六七一一（編集）
振替口座六―四一二三

装幀者　安野光雅
印刷所　株式会社精興社
製本所　株式会社積信堂

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。
落丁本・乱丁本はお取替いたします。
© SUSUMU WATADA　Printed in Japan
ISBN4-480-02239-2 C0136

78952

ちくま文庫

ドキュメント 帝銀事件

和多田進

大外701378631

贈書

人文外国語学院图书馆
藏书

筑摩書房

目次

第1部　追跡・帝銀事件

I　「単独同一犯説」を疑う……10

謎の歯科医　12

奥山庄助の前歴　20

帝銀事件　24

二つの未遂事件　38

複数犯説　45

板橋支店に現われた男　59

轢殺の疑い　63

II　清水虎之助の「不実在説」を疑う……69

B県ロッジと大森精一の家族　70

詐欺事件への疑惑　86

解明されない金の出所　94

闇の仲間たち　101

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

清水の家 106
塩酸プロカイン歯科用注射薬 113
二人の清水虎之助 118
III 「虎の絵」の謎 …… 132
金屏風に描かれた虎 133
二枚の虎の絵 141
アーレン軍属を追って 152
奥山の面通し 164
第2部 毒の告発
I
甲斐氏のプロフィル 191
歴然とした食い違い 194
II
鑑定書のミステリー 208

古畑氏の名前はなぜ無いか　211
不思議な暗合　215

III

「市販の青酸加里」の弱点　221
胃内容の証明　224
超即死の量　226
返書の内容　229
推理の終点　233
三つの事件と一つの真実　237

追記　240
文庫版あとがき　251
解説　見えてくる組織エゴイズム　小林康欽　255

ドキュメント　帝銀事件

第1部　追跡・帝銀事件

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

I 「単独同一犯説」を疑う

史上稀に見る集団毒殺事件・帝銀事件の犯人が、帝展無鑑査のテンペラ画家・平沢貞通だと最終的に決定されたのは、昭和三〇年（一九五五）四月六日のことであった。

その日、最高裁大法廷は、「上告棄却」の判決を下したのである。当時の新聞には、「この宣告によって平沢被告逮捕以来六年七カ月にわたって闘わされた黒白の論争は終止符を打たれ、平沢の死刑は確定する」と記されている。しかし、その後今日にいたるまで「黒白の論争」に終止符は打たれていない。より正確に言えば、平沢クロ説などはほとんど現われず、平沢シロ説だけが流布してきた。そして、それはまた理由のないことではなかった。「被告の自供が、被告に不利なただ一つの証拠」だったからである。

帝銀事件は、帝国銀行（第一勧業銀行の前身）椎名町支店で、行員と関係者一六名中一二名が青酸化合物といわれる毒物によって毒殺された事件である。敗戦後まもない、昭和二三年（一九四八）一月二六日に発生したこの事件は、闇市、浮浪児、パンパン、GHQなどという言葉とひとつになって、日本人の〝戦後風景〟となった観さえある。帝銀事件の翌年に

は、「一九四九年の暑い夏」として有名な、下山、松川、三鷹事件が発生した。

朝鮮戦争の前年のことであった。一九四九年――昭和二四年の暑い夏に起こされた一連の事件と、私たちが研究をつづけてきた帝銀事件の間にどのような関連があるのか、ないのか、それは私たちにも不明である。しかし、にもかかわらず、米軍という存在が、昭和二三年と二四年の事件の背後になければならなかったということだけは、断言してはばかる必要のないことのように思われる。

数年前から「帝銀事件研究会」と呼んでもよいようなものができていた。正式のものではないが、この事件に興味のある者たちが情報交換をする機会を幾度か持った。メンバーの共通の確信は、平沢貞通は帝銀事件の犯人ではあり得ない、ということであった。

平沢が帝銀事件の犯人でないとすれば、いったいだれがその犯人であるのか――。率直に言って、この点についてもメンバーの興味は共通であった。しかし、「真犯人」をつきとめるのは、市井の人間にすぎない私たちの仕事ではない。それは、言うまでもなく国家の仕事である。そう考えつつも、やはり私たちは「真犯人」に対する興味を完全に放棄することができなかった。事件の真相を追究するということは、同時に「真犯人」についても考えるということであったからである。

そうしたある日、私たちは偶然のことから彼の話を聞くことになった。彼がどのような人物であるかについては、防衛上の問題から、いまは明らかにすることができない。しかし、彼が語ってくれた衝撃的な話の内容は、帝銀事件の真実を解明する有力な手がかりに違いな

いと私たちは判断した。彼が語った不思議な体験というのは、以下の通りである。

謎の歯科医

彼が奥山庄助（仮名）という歯科医を訪れたのは、昭和三三年（一九五八）一二月の暮れもおし迫ったころであった。奥山医師に以前かぶせてもらった右上小臼歯の金冠が食事中にはずれてしまったので、それを治療してもらいに行ったのである。

奥山歯科医院は、にぎわう街並みからちょっと路地に入ったところにある。とくべつ商売熱心な歯科医というわけではない。看護婦として以前から奥山歯科に住み込んでいた中年の女性がそのまま入籍して妻になった、という噂もある二人暮らし。助手などもいない。ひっそりとしたあまり流行っているとは思えぬ歯科医院である。

奥山は彼の歯を治療しながら「本格的な治療は春になってからにして、今日は仮りにゴムを詰めておくから、年末に詰め直しにきて下さい」と言った。金冠をかぶせてあった歯は、もともと虫歯などではなかったから、彼は軽い気持ちで奥山に礼を述べて帰宅した。

ところが、翌日あたりから彼の体調がおかしくなりだした。激しい胸焼けが連日つづく。食事をするのさえ辛い毎日だった。消化剤を飲んだり、軽い運動をしたりしたが、一向に効き目はなかった。

そんなわけで、彼は歯に詰めたゴムを替えに行くことなどすっかり忘れてしまっていた。オセチ料理も食べられない正月がすぎたころ、彼はようやく歯に詰めたゴムをとりかえなけ

ればならぬことを思い出した。別に痛みはなかったが、几帳面な性格の彼は、気づきながらいつまでも放置することができない。詰めてあったゴムも、舌ざわりの感触では、すっかりなくなっているように思えた。

奥山歯科に行くと、歯を見ながら奥山は「この歯はどういうことになっていたか」などと訊ねた。奥山のそんな訊き方に、彼は一瞬けげんな感じをいだきはしたが、それでも「暮れにゴムを詰めかえて、本格的には春から治療しようと言われました」と答えた。彼の返事を聞くと、奥山歯科医師は、「準備室」の方にしばらく行ってしまった。彼はカルテでも調べているのだろうとぼんやり考え、ぽかーんと口を開けたまま治療を待っていた。

どれくらいの時間がたったろうか。かなり考えていたと彼に思えるほどの時間が経過したとき、奥山が彼の背後にもどってきた。そして、独り言のように「神経を抜こうか抜くまいか……」と言った。彼は、依然として口を開けたまま奥山のその独り言を背中で聞いた。そして、痛くもない歯の神経を抜くのかなあー、と、またぼんやり思っていた。

奥山が「神経を抜きましょう！」と、思いがけない勢いで彼に言ったのは、そのときであった。「それは、まさに決断したという勢いで、私が思わずびっくりするほどの語調でした」と、彼は私たちに述懐する。

治療を終えた奥山は「神経を殺す薬を入れたから二日後に必ずきてくれ」と言った。

歯科医院から帰る道すがら、なんと不思議な歯科医だろう、と彼は思いはじめていた。あんなに考え抜いて決断して神経を抜く歯医者なんて、見たことも聞いたこともない。なんと

大げさなんだろう。おかしな人だ……。

そのときだった。脈絡もなくモヤモヤしていた彼の頭の中に、電撃のように〝あのこと〟の記憶が蘇ったのは――。

〝あのこと〟――。

それは、昭和三〇年（一九五五）四月上旬に溯る。帝銀事件の被告であった平沢貞通が、最高裁で最終的に犯人と決定された日の、直後である。

彼は自宅の廊下で椅子に腰掛け、新聞を読んでいた。新聞には、帝銀事件の最高裁判決をめぐる記事が大きく載っていた。庭先に人の気配を感じた彼が、ふと見ると、庭木戸のところに奥山歯科医が立っていた。治療の際の世間話は別にして、彼と奥山の間柄は親しくはなかった。家に往き来するようなこともちろんない。ところが、どういうわけか奥山は、その日にかぎって心安く庭先から入ってきた。親しい間柄ではないとはいえ知人には違いない。彼は笑顔で奥山を家に上げた。しかし、これといって共通の話題があるわけではなかった。彼は、いま読んでいた新聞記事を話題にした。自然のなりゆきだった。

「今日の新聞は大変でしたね」。そう言われた奥山は、新聞を読んでいなかったのか、「えっ」と言ってけげんな顔をした。彼は「いや、帝銀事件のことですよ」と言って、新聞が大きく報道していることを話す。ところが、奥山は「ああ、そうですか」と言ったきり、その後の話がつづかない。奥山には興味のない話なのだろうと思って、彼は別の話題にきりかえ

ることにした。

話は趣味の話から絵の話になった。すると奥山は「私は絵が好きで、日本テンペラ画会（仮名）の会員です」と言い出したのである。日本テンペラ画会の会員だと聞いて、彼は「オヤッ」と思った。帝銀事件の犯人とされた平沢貞通はテンペラ画家であり、日本テンペラ画会の会員である。それは何度も新聞等で報道され、世間周知の事実と言ってよい。それなのに、奥山は世間で大騒ぎになっている帝銀事件に興味がなさそうにしたのは、いったいどうしてか。

最初、帝銀事件を話題にしたとき、奥山はなぜ平沢貞通を知っていると言わなかったのか。彼はそれで、「オヤッ」と思ったのだ。やや潔癖性の彼は、ちょっとむきになって「じゃあ、あなたは平沢を知っているはずじゃないですか」と言った。それに対して奥山は「知っています。証人にも出ました」と言ったのだ。彼の「オヤッ」は、この瞬間にひとまわり大きな「オヤッ」に変貌した。さらに彼は「平沢というのはどんな男ですか」と訊ねると、奥山は「まあ、あんな男です」と、わかるようなわからぬような返事をした。奥山は多くを話したがらない様子だった。

彼は「私は、平沢は帝銀事件の犯人ではないように思う。平沢は精神的に変な人だと言われているから、だれか周囲の人に利用されたのではないかと思うんです。荏原の未遂事件なんかは間が抜けた感じの事件だから、平沢がやったことかもしれませんが、帝銀事件はちょっとスゴすぎますよ……」などと、素人っぽい感想を述べたりした。現在でもそうだが、平

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton